

第三次ボランティア活動（2012年10月）

前書き

1. 活動地域の広がり
2. 活動内容
3. 参加人数
4. 復興の進み具合
5. 子供たち
6. ボランティア活動の意義
7. 「希望の牧場」
8. 成熟社会
9. 防潮堤
10. ボラセン（ボランティア・センター）さまざま
11. ドイツからの寄付金で建てられる公民館
12. ボランティア活動とグループ内調和
13. 来年の計画

前書き

中心グループはドイツから10月9日に成田に到着し、10日に大船渡に入った。そして19日の早朝に一応解散したが、中心グループはさらに二日間かけて車で南下し、途中福島浪江町を訪問した。今回は日にち別による日記形式を改め、項目別に報告する。報告よりも忘れないうちに印象を記しておきたいという気持ちに動かされて書いた印象記という方が正しいだろう。

今回の活動の特徴としては活動地域の広がりやヴァリエティーに富んだ活動内容がまず挙げられる。

1. 活動地域の広がり：宿泊地を前々回および前回同様大船渡の「福祉の里センター」に定め、近隣の陸前高田、大槌町、気仙沼までカバーすることができた。そのためには絆・市川のメンバー（2台）および大船渡在住の友人たちの車（2台から3台）提供が不可欠であった。毎日のボランティア参加者の数が20人ほどになると前もって各地域のボランティア・センターに申し込んでおき、朝の8時半、時には8時15分までに到着していなくてはならない。宿を出るのが早くても7時15分頃になるので、車が絶対必要であった。時には5台の車で移動した。

2. 活動内容だが、多岐に亘る活動の毎日が続いた。

11日に第一グループはベルリンのJ・F・ケネディー小学校の子供たちが集めた寄付金プラス絆・ベルリンの義援金20万円を大船渡の赤崎小学校にお

渡しする。午後は立根小学校を訪問し、6年生と交流をした。第2グループは市内の復興状況を見学。第3グループは建築家グーチョー氏のグループで、上長部公民館（ベルリン独日協会の資金提供で「遠野まごころネット」が施行主。設計は「絆・ベルリン」メンバーのグーチョー氏）の建設状況を見に行く。

- 12日は全員で陸前高田市の上長部の公民館敷地の隣に「遠野まごころネット」が用意してくれたリンゴの木（紅玉）を25本植樹した後、住民の皆さんから昼ご飯をご馳走になり、また話し合いをするなどして交流をする。
- 13日は大船渡のボラセンによる様々な作業（第一グループは側溝の泥上げ、第二グループは漁網の整備など）。
- 14日には全員で大槌町のボラセンによる野球場の草取り。午後1時から5名だけ木工場予定地の視察。午後6時から全員参加して立根町公民館で首都大学、立命館大学、立根町の皆さんと交流会を行う。
- 15日は気仙沼のボラセンによる大泉海岸の清掃。大泉海岸にはまだたくさんのゴミが流れ着いていたので、プラスチック類、木材、鉄などに分別して集めた。名前入りの消防士の帽子が見つかり、届けた所、やはりお亡くなりになった方のものと判明する。
- 16日も気仙沼のボラセンによる大谷海岸の清掃。大谷海岸はほとんどきれいに片づいていた。午後からはそのため海岸近くに立っていた観洋ホテルの庭の整備をする。副団長のフランクが足首骨折の怪我をする。
- 17日は陸前高田市のボラセンによる市内中心地の側溝泥上げ。午後3時半から伊東豊雄氏のグループによる「みんなの家」を見学。
- 18日の木曜日には午前中大船渡市長を訪ね、復興状況についてレクチャーを受け、昼から長洞仮設住宅団地の皆さんによるサンマのご馳走、そして我々の手による菜園場の階段作り、夜は「遠野まごころネット」の方々、お世話になったの方々、団地の皆さんとのお別れ会をする。
- 19日の早朝に一応解散し、中心グループは車で南下しながら被災地を訪ねた。南三陸町では社会福祉協議会で貴重な講演を聞くことができた。
- 20日には福島県の浪江町の「希望の牧場」を訪問し、後述するように衝撃的な体験をする。

3. 参加人数：ドイツからの参加者は10名（その内ドイツ人が6名、在ドイツ日本人4名）、日本からの参加者は15名（ドイツ人1名、日本人14名）、総勢25名。10月半ばに学年始めということもあり、ドイツ人学生の参加は少なかった。4人が参加したが、すべて大学院生だった。日本人の参加者が多いのは、絆・市川の友人や絆・ベルリンの活動を知った日本人が参加を申し込んできたからである。今回はドイツ人2名、日本人4名の建築家が参加した。年齢的には60歳以上が12名と高齢者が多かったが、幸い一人の怪我以外は風邪一つ引かず老弱男女一緒に活動できた。最高年齢はドイツ人の76歳だった。

4. 復興の進み具合

被害の規模も大きく関係しているだろうが、自治体によって復興の度合いが違っている。大船渡市は中心地は瓦礫はすべて撤去され、側溝の掃除も終了し、スーパーマーケットやホテルが建てられつつあり、再建の槌音が聞こえる感じだった。18日の市長との会見でも、港や工業・商業地や住宅地の区割りが引かれ、渡された工程表を見ると5年後には復興が終了するようになっていた。住宅地の高台移転も計画が進み、実現へ向けて一步踏み出された。それに比べて被害が甚大だった陸前高田市（人口2万人弱の1割の方が亡くなられたか、未だもって行方不明である）は17日の市庁舎横の側溝の泥上げをしたが、市庁舎内も3月11日のままの状態におかれ、正面玄関には花輪やお線香がおかれていた。



二人の絆メンバーがお経を上げて、全員が黙祷し、哀悼の意を表した。帰路に立ち寄った南三陸町も復興が遅れていたが、もっとも復興が遅れているのが、陸前高田であることは間違いない。それぞれのボラセンの活動状況を見ても、大船渡では週に金、土、日の三日間だけ受け付けているのに対し、陸前高田は火曜日以外毎日受け付けている。またボランティアの数を聞いたが、陸前高田は平日でも50名から100名、週末は300名以上も参加している。大船渡では週末でも20人ほどだ。

復興の最も大事な目標は職場が復活することである。ところが最も大事な漁業が復活からはほど遠い状況にある。13日に大船渡の港で漁網の整備を手伝っていた時に網元の新沼さんから聞いた話がある。まず失った漁船を注文しようにも造船所が手一杯で受けしてもらえないので北海道に注文している。来年の夏にならないとでき上がらないそうだ。また求人はあるのだが、ほとんどが定職ではなく、数ヶ月の短期の臨時ばかりだとのこと。

さらに3・11以前にも三陸地方は過疎化などの問題が山積していた。そのため復興が進んでもそれらの問題が解決されるのは非常に難しいだろう。若手の労働力は復興の遅い足並みに号を煮やして部分的に大都市に出ていっていると聞く。産業構造の抜本的な改革による復興が待たれる。大船渡市長の戸田氏が報告していたように政府



が大船渡市及び陸前高田市を「環境未来都市」に指定したことはその一つのスタートと言えるかもしれない。

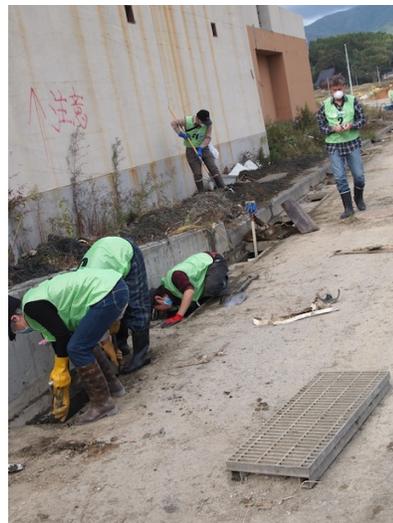
5. 子供たち

11日にはまず大船渡の赤崎小学校を訪問し、ベルリンのジョン・F・ケネディ一小学校からの義援金20万円を6年生のクラスの前で生徒代表にお渡しした。絆・ベルリンで一番若いヤーナが挨拶をして、生徒たちの質問に答えたが、残念ながら生徒側からはあまり元気が感じられなかった。佐々木貞子校長先生の話では、校舎が津波で全壊したので、蛸の浦小学校の校舎で一緒に授業をしているが、間借り生活の余波と家族や家屋が被害に遭った生徒が多いので、全体として元気が出ないとのことであった。津波が押し寄せたのが放課後であったこともあり幸い生徒自身は一人も被害を受けなかったもので、ほっとしているとも。午後に大船渡の世話人の今野さんの紹介で被害に全く遭わなかった立根小学校でも6年生のクラスと交流をしたが、こちらでは質問もたくさん出され、活気が感じられた。あまりにも明確に違いが現れたので、驚いた。



6. ボランティア活動の意義

ドイツで時々わざわざ日本に行ってボランティア活動をすることに意義があるのかと質問された。それより旅費を義援金として差し出した方が意義があるのではとも。どうせ被災地観光にすぎないのではとも。たしかにそれには一理ある。だが、僕の気持ちとしては去年の3月11日以降の声も出ないほどの被害の凄まじい状況をドイツのテレビで見て、とっさに目の前で溺れた人がいれば手を出すようにとにかく現地に行って何かをしたいという思いに素直に従いたいと思ったのが出発点である。ボランティア活動の後プライベートに東京で友人に会ったりしているので、ほら、助けに行くだけではないんじゃないかと言われれば反論のしようもない。そして、我々のできることは非常に



限られているのは現地に入ればよく分かる。20人近い我々が側溝掃除をしても一日で50メートルから70メートルしかできない。被災地に入って活動の後遠いドイツからよく来てくれた、ありがとうと言われれば、素直にうれしい。そして、不思議なことにこちらが元気になる。その意味でボランティアは本人がまずしたいと言う欲求がまずあり、次に多少でもお役に立てば幸いなのだ。正直なところこちらの方がより救われているのかもしれない。

今回の絆・ベルリンの寄付金を集めるにあたって、具体的に助けに行くというよりもAnteilnahme zeigenするのだとお願いした。ドイツ語での意味は

「心遣いを示す」と訳せるかもしれない。気になっています、気になって仕方がないんです、ですから来てみましたという感じではないかと思う。それを受け取ってもらえればこちらもうれしいと感じてドイツに帰れる。そう考えている。寄付を下さったみなさんに、被災地でこれだけ具体的に成果を出してきましたよと報告するものはあまりないというのが正直だろう。ボランティア活動によって肯定的なものを受け取るのは両方の心の領域にあるのではないのだろうか。

我々の活動以外にも例えばミュンヘンのベレンベルクさんは折り紙が得意なので、昨年12月、また今年の11月に被災地を訪問し、学校や仮設住宅で折り紙行脚をしている。あるいはベルリンの「絆・ベルリン」友の会のみなさんは毛布に自分たちでパッチワークをつけて、東北の皆さんに差し上げ、喜ばれている。何かをしたい（して上げたいではない）が出発点で、その何かは自分ができることでいいのではないか。

現在の僕の理想をいえば、ドイツで復興基金ファンドを創り、ドイツ人のみなさんから寄付をして頂き、それを資金として被災地の企業活動に提供することだが、まだ具体的なステップが踏めないでいる。

7. 「希望の牧場」

今回の活動で最も印象深かったのは「希望の牧場」訪問であった。「希望の牧場」は福島の警戒区域にある浪江町の酪農家の吉沢さんが中心になって自分の牛たちを屠殺しろとの政府の指示に逆らって、現在800頭の黒和牛を生かしている農場（福島第一原発から14kmの地点）である。そのことをドイツで知ってできれば訪問したいと思い、いろいろ調べてみたら、警戒区域なので普通ではとても入れないとのことであった。だがあきらめきれず、とにかく行けるところまで行ってみようと思われ仲間8人と3台の車で浪江町に向かった。ところが、吉沢さんの連絡先に電話し、些少だが義援金もお渡ししたいと言うともう一人常駐の針谷さんがとにかく来てみてくれとのことだ



ったので、入り口まで行ってみた。到着すると岐阜県の機動隊員が3人いたが、聞いてみると、いや入れますよとのこと。

いや、壮観であった。牧草を食む200頭の黒牛の群れ。針谷さんの話を聞きながら、牧場内を案内してもらおう。針谷さんは酪農家でもなく、お百姓でもない。ルポライターだが、吉沢さんと接するうちにのっぴきならなくなり、牧場に入ってしまったのだそうだ。健康状態はとお聞きすると、もう2000シーベルトぐらい浴びているのではとのこと。そして自問自答する毎日だとのこと。売れない牛、それも本来ならいつかは売られ、食肉になってしまうはずだった牛、放射能を浴びていつかは死んでしまう牛の面倒を見ているのは何のためだと。牛の寿命は普通20年ほどなので、いつかはなくなる。

ぼくも理解しようとして考えついたのは、牛たちに生命を感じてしまったのではないだろうかということだ。いくら放射能を浴びて、役に立たない牛でも生きているのだ。殺せない、できるだけ長く生かしたいというのは自然な心の流れだ。訪問後一緒に訪問したドイツ人と話したが、印象深かったけど同意できないとの意見だった。人間中心主義的なキリスト教の考えからすれば、役に立たない動物のために人間である自分の命を投げ出すのは、納得いかないだろう。仏教的な観点からすれば、生き物はすべて平等だ。



だから、動物でも生き物として受け入れたら、自分（人間）の命を犠牲にしても長生きさせようとするだろう。そしてそれに共感できるだろう。

訪問後の仲間の話では針谷さんにご家族のことを聞いたところ、奥様とお嬢さん一人がいらっしゃるそうだ。それならば、余計にドイツ人には受け入れられないだろう。日本人の僕にも家族に対しての責任があるのでは考えながら、心のほんのちょっぴりした隙間でなんとなく受け入れているのが感じられた。僕が同じ立場だったら、逃げてしまっていたらと思うられるが。

8. 放射能と魚と市民社会

フクシマの放射能の問題は様々な面において影響がある。例えば食物による内部被曝の問題としてまだまだ尾を引いている。福島産はもちろん隣の県の茨城産、栃木産でも野菜はなかなか売れないと聞いている。風評被害と言えるし、生産者の皆さんには本当に気の毒だ。では、魚はどうする。どこで獲れたかはある程度特定できるが、どこを回遊してきたのかは分からないから厄介だ。筆者自身は年齢も年齢だし、魚好きなので、どうせ海の放射能汚染は大したことはないだろうと高をくくって、平気で食べている。特に大好物のサンマは旬なので10月の日本滞在中4週間で15匹ほどたべたと思う。大船渡には新鮮な秋サンマが水揚げ

されるし、炭火で焼かれたのを見れば、舌なめずりをしてご馳走になった。市内の立根町、長洞仮設住宅の皆さんに振る舞われて、それぞれ3匹も平らげてしまった。脂が乗っていてとてもおいしかった。ところが、今回の滞在中こんなおいしいサンマを食べないどころか、太平洋側で獲れる魚は食べないという人に何人か出会った。彼らに言わせると、政府が発表する数値はまず信用できないという。たしかに昨年



3月以来政府の危機対応と対策は信用するにはまったく心もとないレベルにある。人間は一度信用しなくなると、その回復は非常に難しい。公式発表の数字をまったく信頼しないと、じゃ何を信頼すべきなのか。それに取って代わる測定機関があるのかということになる。今回の滞在中にボランティア活動の後昔のドイツ人教え子を札幌に訪ねた。9月にベルリンでお目にかかった「福島の子どもたちをまもる会北海道」の皆さんを札幌に訪問し、そこで市民の皆さんが自分たちで測定機器を購入し、食べ物の放射能汚染を測っているグループに出会った。さっぽろ市民放射能測定所の「はかーる・さっぽろ」である。代表の富塚とも子さんにお会いし、測定のデモをしていただいた上に、お話を伺った。測定機器はベラルーシュから購入したもので、500万円もしたそうだ。みなさんの活動に頭が下がった。このような市民のグループがたくさん誕生し、ネットワークを組織し、毎日の食べ物を測定し、発表してくれれば、市民の皆さんも疑心暗鬼に陥らないで食べものを口にできるだろう。同時に政府が問題のあるデーターは発表しない（筆者は政府がデーターをねつ造しているとは思わないが）などの反市民的な作為行動は取れなくなる。このようにして政府を包囲するのが成熟市民社会への第一歩になるだろうと確信している。

9. 防潮堤

大津波の被害に遭った方々の考えを聞くと防潮堤に対して複雑な感情を抱いていることが分かる。政府は原則的にすべての被災された地域に防潮堤を築く計画を立てている。ほとんどが9メートルから10メートル近い高さの防潮堤になる。住民の方々はたしかに防潮堤は必要だろうが、3・11のような津波が来たら、計画中の高さでは役に立たないし（宮古市田老町では10メートル以上の高さの防潮堤が自慢であったが、そのため多くの方が安心して逃げなかったのかえってた



くさんの被害者を出したと言われている)、海が全く見えない高さの防潮堤では、景観の問題などがあり心から賛成できないという意見を何度も聞いた。気仙沼市の大谷海岸にある観洋ホテルでは昼食を食べたが、その時女主人が津波の体験を語ってくれた。まず海の水が引いていくのが見えたので、慌ててみんなに声をかけて国道45号線を越えて山に駆け上り、一人の被害者も出さなかった。これも海が見えたおかげであり、これが目の前に9メートル以上もの防潮堤ができれば、海が見えないので逃げ遅れてしまうだろう。だから、市や県にもっと低くするなど工夫してほしいと陳情しているそうだ。最近知事さんがレストランに来たので、お願いしたとも。

10. ボラセン (ボランティア・センター) さまざま

今回は大船渡、大槌町、気仙沼、陸前高田のボラセンでお世話になり、作業を幹旋して貰った。1年前には「遠野まごころネット」でもお世話になったので、都合5カ所のボラセンを体験した。ボラセンは普通各自治体の社会福祉協議会が組織するものだが、気仙沼は復興事務所のものだった。それと「遠野まごころネット」は遠野の社会福祉協議会が始めたが、組織が大きくなり、独立したNPOとして活動している。それと独自の100人(去年は200人以上)ほどの宿泊施設も供えているので、他のボラセンとは大きく異なる。安全インソール入りの長靴、ボランティア保険の加入などが前もって義務づけられている。組織割もしっかりしていて、体育会系の規律が要求されている。軍隊みたいだという声も聞かれる。次に大規模のボラセンは陸前高田だった。平日でも100人、週末は300人も受け入れるとあって、受付、作業配布、道具の貸し出しとセクション別にしっかり組織され、やはり企業並みの効率性が感じられた。それに比べて大船渡(ゴム長も保険も提供してくれる)も気仙沼も家族的という感じだった。特に気仙沼では最初の柔軟体操から工具の管理、また作業の指導、終了後全員で集まり、印象を語ったり、質問の時間が設けてあったりときめ細かな対応が心地よかった。



11. ドイツからの寄付金で建てられる公民館

「絆・ベルリン」の仲介で陸前高田市の上長部に公民館が建築中だ。資金の主な額はベルリンの独日協会が提供している。やはり我々の推薦による日本在住のドイツ人建築家のグーチョー氏が無償で設計をした。さらに彼は数百



万に上る資材や薪ストーブの寄付を取り付けてきてくれた。そこまでは独日友好のためのいい話なのだが、様々な軋轢があり、残念なことに痛し痒しのようなのだ。日本側にいわせる（もちろん明確には発言していない）と、ドイツからの資金で、ドイツの建築家が情熱込めて、公民館を建ててくれるのは本当に有難い。ところが、様々なアイデアを取り入れた建物は高くつく。それに大工さんたちも要求が多すぎて手こずっていると聞いている。それよりも半分近くの費用で同じような目的に使える建物ができるのではないかと（そのような考えはスタート時点でも聞いた）と。筆者ががんばってドイツ人建築家を参加させたので、現在ちょっと反省している。

その話をある人にしたら、意欲的な建築家に頼むと高くつくんですと言われた。といっても、上長部の公民館は独日友好のシンボルとしてこれから長く使われることを願う。また地元の人たちも大変喜んでいて印象を受けた。今年の12月の初めに竣工式が行われる。最初の予定では8月のお盆の時までに完成するはずだったのだが、被災地各地で建設ラッシュになり、大工さんがひっぱりだこで遅れに遅れてしまった。次の予定として10月中の完成も視野に入っていたので、我々も今回それに合わせて訪問したのだが、残念ながら間に合わず祝えなかった。少なくとも25本のリンゴの植樹をして多少でも貢献できたので、うれしかった。できればリンゴだけではなく、他の果樹も植えて、経済的な面でも地域起こしに貢献できるようにしたらいかがでしょうかと提案したが、



地域のみなさんがおっしゃるには土地の規模も限られているし、年齢的にも無理だとのことで諦めた。ただ、数年後に民宿も建てられる予定なので、リンゴが実った時期に訪問し、民宿に泊まり一緒に収穫するのが夢だ。

もう一つ同じようなプロジェクトを仲介している。ドイツのロベルト・ボッシュ財団が大槌町に建てられる集会場兼木工工房を全額負担してくれることになった。施行主の「遠野まごころネット」とドイツの財団との間に立って、仲介の労を執ったのが「絆・ベルリン」である。今回はその予定地を視察してきた。吉里吉里湾を見下ろす風光明媚な高台にある山の傾斜地に保育園、老人ホームなどと一緒に建てられる。まだ木がたくさん生えている土地なので、果たしてここに設計図にあるような集会場兼木工工場が建つのかなと思ってしまったが、「遠野まごころネット」のプロジェクト・マネージャーの及川さんとNPO吉里吉里国代表の芳賀さんは夏頃には完成させたいと言っていたので、来年夏に訪れる際の楽しみにしている。

12. ボランティア活動とグループ内調和

今回の宿舎は前回同様大船渡の福祉の里センターだった。宿泊、朝食、夕食で3000円弱はとても廉価な上に、温泉並みの広々としたお風呂もあるし、ゆったりとしたロビーもあり、快適な滞在だった。今回もドイツからの飛行機代は自己負担で、現地集合、現地解散、上記の滞在費は「絆・ベルリン」が負担した。昼食は自己負担。費用の点は「絆・ベルリン」への寄付金があるので、まったく問題ないのだが、やはりプライバシー・ゼロの24時間の共同生活になるとストレスがたまってくる。フランク・ブローゼ副団長の怪我以外は大きな問題が起きなくて、よかったのだが、意外と問題になったのが、いびきであった。4人部屋で起居を共にしていたが、部屋割りの目安もいびきをかくかどうかであった。前回にも同じような問題があったので、前もっていびきをかく人に自ら名乗り出てもらって、彼らだけ別室に入れようとしたのだが、男性はあまり名乗りでくれず困った。あるいは意外と自分がいびきをかくのを知らなかった人もいたりして。いびきがストレスの大きな原因になりかねないことは、芥川龍之介の作品「いびき」のかかわれている通りである。また日本人は団体行動に慣れているが、ドイツ人は自己主張が強く、簡単なこと（例えば蒲団の向きなど）でも議論になってしまい、疲れることがあった。

グループ内調和に大きく貢献したのは、日独語の通訳であった。前回同様山田頼子氏が16日まで同時通訳してくれて、彼女が離れた後は小林亜未さん、鈴木ひろむさんが逐語通訳してくれた。毎晩夕食の後ミーティングをして、グループで分かれて活動したときは、グループ報告があり、印象、質問、反省の発言があったので、通訳はグループ内調和にとって本当に重要であった。

13. 来年の計画

帰って来たばかりで来年のことを語るのは早すぎるだろうが、18日の最終日の最後のミーティングでも全員が今回参加してとても満足したと述べていた。そして一人を除いて来年も参加したいと言っていた。さらに来年ボランティアに行くなら、ぜひ参加したいという声が数人のドイツ人から届いているので、どのような需要が来年あるか予測つかないが、現地における需要があれば第4次ボランティア活動を実現したいと思っている。

2012年11月11日

福沢啓臣